

第9回
病気を治すだけでなく、
その人に寄り添って歩く。
そういう家庭医がいま
求められている。

東日本大震災で大きな被害をうけた三陸の二つの病院。
瓦礫の中から立ち上がり、地域医療再生のために最前線で日夜奮闘する
病院長お二人に、東北の地域医療が抱える様々な課題を聞いた。

Photo: Miki Fukano Design: Takayoshi Ogura

南三陸町公立志津川病院
院長
櫻田正壽氏

気仙沼市立本吉病院
元院長
川島実氏

聞き手
女優
紺野美沙子さん



紺野 震災のとき、志津川病院は本当に痛ましい状況でしたね。

櫻田 はい。建物の四階まで津波が押し寄せて、病院は壊滅的な被害をうけました。その後、イスラエルの医療団が残してくれた施設を引き継いで、四月には診療所を開設したんですが、何かのとき町民が入院できる施設がどうしてもほしいというこ

とで、廃院が決まっていた登米市立の米山病院を貸してもらったんです。
紺野 南三陸診療所と公立志津川病院米山病棟、その二箇所を運営されているわけですね。
櫻田 これが大変なんです。三十五キロ離れますからね。先生たちは往ったり来たり。し

かも二つの施設それぞれに、土日も含めて毎日当直の先生を配置しなければならぬんです。全国の先生方の応援や、地域医療再生のために東北大医学部が創設した東北メディカル・メガバンク機構からの派遣スタッフで何とかまわっていますが、それがなかったら二つの施設を運営していくことは到底できなかったですね。

川島 本吉病院にも、メディカル・メガバンクから二名の先生に来てもらっています。四カ月交代で、途切れないようにバトンタッチしていくんです。
紺野 川島先生は震災のとき、山形の病院からボランティアスタッフとして本吉病院に来られ

ていたんですね。

川島 そうです。震災後、院長先生が退職されてしまい、後任がいなくてというところで頼まれたんです。

紺野 やはり大変でしたか？

川島 前の院長さんは週に五日当直をしていたというんです。一人しかいないから仕方ないんですが、そういう奇特なお医者さんに支えられてきた地域なんです。でも僕はそれほど奇特じゃないから、とりあえず仲間を集めようと思ったんです。「地域医療ってこんなに面白いんだよ」って、全国あちらこちらで

説いてまわりました。

紺野 布教活動ですね(笑)。

川島 医学部の講演会で地域包括ケアの話をするときは、サッカーの例えを使うんですよ。地域の健康を守るための関心をサッカーに例える。相手のゴールを脅かすフォワードは、ワクワクンとか予防とか保健とかそう

いうもの。中盤はヘルスプロモーション。毎日の運動とか歯磨きとかですね。介護とか福祉はディフェンダーで、医療というのは結局ゴールキーパーである、と。

紺野 やっぱりゴールキーパーは川島じゃないと(笑)。
川島 サッカーを見ているとわかりますが、川島が獅子奮迅の活躍をするような試合は、だいたい負け試合なんです。ゴールキーパーには、態勢を立て直したためにディフェンダーからたまにパスが来るぐらいがちょうどいいんです。で、ゴールキーパーはいちばん後ろの見晴らしのいいポジションにいるんだから、すべてのポジションとうまく連携をとって、試合の流れ全体を掌握しないとイケない。マネージメント能力がもとめられるんです。

櫻田 これから動けないお年寄りがどんどん増えていきます。



櫻田正壽

Masatoshi Sakurada

昭和31年生まれ。昭和58年3月東北大学医学部卒業。58年から61年秋田県平鹿総合病院で研修。61年東北大学第2外科入局。平成6年から7年英国Cambridge Addenbrooks Hospitalに留学(肝臓移植)。18年より公立志津川病院勤務。25年11月、病院長に就任。

今、医師としてのあなたを 日本でいちばん求めているのは、 東北です。

たとえ病棟があっても、立派な医療設備があっても、清潔なベッドがあっても、お医者さんがいなければ、そこは病院とは言えない。いま、東北が直面しているのは、その現実です。そして、東北の医師が不足しているという現実も、東北以外のお医者さんにしか救えない。そう思うのです。この誌面を借りて、医師であるあなたにお願いがあります。移り住んで来てほしいとは申しません。週に2、3日、一年にすれば100日程度でもいい。あなたの時間を分けていただけませんか。東北の力になっていただけませんか。人の幸せは、健康があってこそ生れるもの。そのことを誰よりも知るあなたの力を、今、誰よりも求めている人々が東北にいます。



東北医療福祉事業協同組合 **どこよりも、いのちを愛する東北へ。**

東北エリアにおいて医療・介護などの豊富な経験をもとに経営環境向上のための運営支援、また、人材確保や教育までトータルにサポートします。

■上記広告に関するお問い合わせは

E-mail: doctor@sg-kumiai.or.jp Tel: 0800-800-5533 (通話料無料)

受付時間 平日9時～17時(土日祝日は除く)

東北医療福祉事業協同組合 仙台事務所
〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋 1-1-17 仙台ビルディング駅前館6階

URL <http://www.sg-kumiai.or.jp/>

検索キーワード **いのちを愛する東北**



川島実

Minoru Kawashima

昭和49年生まれ。平成10年京都大学医学部学生時代にプロボクサーに合格。ウェルター級西日本新人王を獲り、注目を集める。29歳でボクサーを引退、和歌山県、山形県などで地域医療に関わる。平成23年10月、気仙沼市立本吉病院院長に就任。「総合診療」「在宅医療」を推進する。26年4月院長退任。

それに伴って地域包括ケアがさらに重要になってくるんです。東北では震災がきっかけになって、ほかの地域より十年早くその課題に直面することになってしまったんです。
紺野 若いお医者さんで最初から地域医療を志す人は増えていくんですか？
櫻田 増えていきますね。昔、若い人は地域医療なんて見向きもしなかった。若いドクターが何を目指すかというところ、やっぱり心臓カテーテルの腕を磨くとか、内視鏡の腕を磨くとか、そういうテクニクを獲得することだったんですよ。

櫻田 かかりつけの家庭医というジャンルは、およそ専門医とは無縁の世界だったんです。でも、昨年あたりから、家庭医も専門医化しようという国の動きがようやく出てきた。川島先生がおっしゃるのは、家庭医のシステムを本吉病院でつくりあげて、本吉に研修にすれば、専門医としての家庭医のキャリアを積み上げることができるようにしたいということですよ。
川島 そのとおりです。本吉にきたら、地域医療、地域包括ケアが学べるし、水と空気がおいしくて、子供がすくすく育つみたいなイメージで、売り出し中なんです(笑)。
櫻田 若い実習生を訪問診療に

連れていくんですよ。そうすると、病気だけじゃなくて、その患者さんの人生の背景まですべて見えてしまう。彼らにとつては未体験ゾーンですからね。外来で診療の手伝いをしてるより、もっと刺激になるみたいですよ。背景まで含めて、その人をまるごと診るとというのが家庭医なんです。
紺野 大病院で手術中心の毎日とは、違う世界なんですかね。
櫻田 一見対極にあるかのようにですけど、どちらも人間を扱うということでは同じなんです。わたしも若いころは、消化管穿孔等の緊急手術で患者さんの命を救うということがいちばんうれしかったです。医者になってよ

紺野美沙子

Misako Konno

昭和55年、NHK連続テレビ小説「虹を織る」でヒロインを演じる。その後、女優として活躍するかわら、国連開発計画親善大使など国際協力の分野でも活躍。平成22年から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。平成26年5月～7月、演劇「日本の面影」を東京および全国で上演。



かったと思います。でもこの頃は、寝たきりのおじいちゃん、おばあちゃんの訪問診療に行くと、「ああ、こんな山奥までよくきてくださいました」と感じて感謝されることも、緊急手術で救命できたのと同じくらい喜びとなりました。
川島 地域医療というのは、その人に「寄り添う」ってことなんです。人っていうのはみんな少しずつ死んでいくので、それに付き添っていくのが僕らの務めなんです。
紺野 この企画を通じて、東北の人たちに寄り添ってくれる先生がひとりでも増えるといいですね。今日はお忙しいところ本当にありがとうございます。